山梨県大福寺木造聖観音菩薩立像の復元制作について

文化財保存学　保存修復（彫刻）　廣崎　萌

木造聖観音菩薩立像　平安時代後期　ヒノキ材　寄木造　内刳り　彫眼　彩色　像高 170.0 ㎝

1. はじめに

山梨県大福寺は天平 11 年(739)に創建され、その後、飯室禅師光厳(武田信義嫡男一条忠頼の子と伝わる)により再建されたと伝わる。同寺の観音堂には、10 世紀末の造像とされる巨大な聖観音菩薩立像が秘仏として安置されている。今回の研究対象である木造聖観音菩薩立像(図 1)は、秘仏の聖観音菩薩立像(観音堂安置)の前立ちとして観音堂に祀られて来た尊像である。

大福寺では、令和 3 年に薬師堂に安置されていた本尊の薬師如来坐像の修復に伴って新たに収蔵庫を整備したことにより、本聖観音菩薩立像も薬師如来坐像とともに収蔵庫に移設された。そのため、観音堂本尊の前立ちの代わりとして観音堂に安置することを目的に、本像の模刻制作を行うこととなった。

本像には度重なる修理の痕跡が見受けられ、背板、両肘先、体幹部両側面、両足先は後補の可能性が高いと推定される。当初部の造形には平安時代後期の定朝様式が見受けられ、全体的な形の動きや服装からは滋賀県延暦寺横川中堂聖観音菩薩立像の流れを色濃く受け継いでいることが分かる。本研究では、前立ち像の役割を担う信仰対象としての復元模刻の可能性について考察する。なお、復元模刻については、大福寺関係者との協議の結果、本像の 3 分の 2 の大きさで制作し、木地仕上げとすることとした。また、本像についての従来の研究は、目視観察による造形や構造の分析とそれに基づく造形論が中心であり、科学的な調査は行われていないため、今回の研究では透過 X 線撮影、X 線 CT 撮影、放射性炭素年代測定、樹種同定を行い、それらの調査結果に基づいて可能な限り制作当初に近い素材・構造技法を用いた模刻制作を行いつつ、失われた部分を復元することで、大福聖観音菩薩立像に関する総合的な考察を行う。

2. 本像についての考察

（1）木取りと構造について

木取りや内刳り、枘などを把握するため、透過 X 線撮影を行った(図２)。像の天地方向から撮影した透過 X 線写真及び CT 撮影による断面写真(図 3)の解析により、正中で寄せた頭体幹部の木材の年輪が酷似しており、正面を木表にしつつ同材から木取りした木材を体幹部左右材に用いている可能性が高いと推定された。そのため模刻に使用する木材は、一本の木材から木取りを行った。

（2）後補部について

本像の背板は、3 枚の薄く細長い板が横に並ぶ様に貼り合わされ、レリーフ状に薄く造形されている(図４、５)。そのため、後補である可能性が高いと判断された。しかし科学的な根拠は存在していなかったため、許可を得て当該部材から微量の木片を採取し、樹種同定調査及び放射性炭素年代測定調査を行った。

樹種同定の結果、頭体幹部材を含め全てヒノキ材である事が判明した。一方、年代測定では、頭体幹部は平安時代後期の年代を示したのに対し、背板材は全て江戸時代の年代と推定されたため、後世の修理材である事が分かった。そのため、背板の復元を行うこととした。

（3）CT 撮影による細部の表現について

塗膜に隠れた細かな造形の確認と、透過 X 線撮影では確認しきれなかった構造を調べるため、CT 撮影を行った。本像は現状で後補の分厚い彩色層に覆われているが、CT データを用いて後補彩色層をコンピュータ上で解析、除去することで、目の表現や天冠台の文様、毛筋の表現などの制作当初の造形を確認することができた。また、CT 撮影により鼻や口先が後補であることや像の顔などの細部の造形も判明した(図 7)。さらに、X 線撮影や目視調査では確認できなかった割首の形状なども判明し、それらの情報に基づいて使用された鑿の幅や形状を特定した。

（4）復元制作について

本像の形状の原型とされる比叡山延暦寺横川中堂の聖観音菩薩立像を参考作例とし、本像の後補部の復元を検討した。しかし、本像は後世の改変が著しいため、造形に類似点が多く見られる小網寺聖観音菩薩立像(館山市立博物館寄託)の目視調査、写真撮影、3D 撮影調査を行い、復元部位の検証を行った。小網寺像は、現存する横川形式の聖観音の中でも、像の大きな形の動きや細部の表現、また顔の造形にまでも本像との類似が確認された。そのため、形式的な表現や衣の表現は滋賀県延暦寺横川中堂所蔵聖観音菩薩立像を参考にし、細かな表現は小網寺像を参考に復元を行った。

特に大規模な後補部材への改変が見られる背面部は、根拠となる当初部は少ないもののいずれの聖観音とも共通した形式を示しているため、詳しく調査を行った小網寺像を主な参考例として復元を行った(図 6)。また後補部の両肘先の復元については、当初部の上腕に対して両肘先が不自然な方向に接着、造形されていたため、当初と断定できる石部神社の薬師如来坐像、浄瑠璃寺地蔵菩薩立像などを参考に復元した。

まとめ

本研究では、本像を科学的に多方面から解析したことで、本像の当初の姿を科学的な証拠を持って、木取り、構造、彫刻表現などを検証し、復元する事ができた。特に彩色層の下に隠された細かな表現が、CT 撮影を行ったことでより具体的に彫刻できたことは本研究において多大な成果となった。

また本像は後補部が多いものの、その表現力の高さから作者は中央の仏師であり、前立ちとして現在まで大切にされて来たため、何度も修理され残されて来たのだと感じた。

本研究では前立ちとして信仰対象となる仏像を造ることで、単なる模刻制作ではなく、当時の制作者と同じように像への想いを込めた制作ができたと感じる。そして、これから本像の身代わりとして大切にされたら大変嬉しい。

参考文献

『甲斐国志』1814 年
『甲斐国 社記寺記』1868 年
鈴木麻里子『大福寺の仏像と歴史』（甲斐 山梨郷土研究会 第 146 号）2018 年
山梨県『山梨県史 文化財編』1999 年

協力

CT 撮影：撮影 鳥越俊行氏(東京国立博物館) /データ加工(図 7) 宮田将寛氏(東京国立博物館)
樹種同定調査：東北大学植物園 大山幹成氏
放射性炭素年代測定分析調査：山形大学高感度加速器質量分析センター 門叶冬樹氏

図 1　正面

図 2　正面 X 線写真

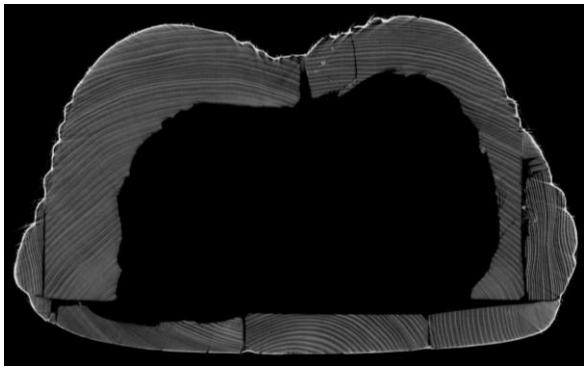

図 3　天地方向からの CT 断面線写真

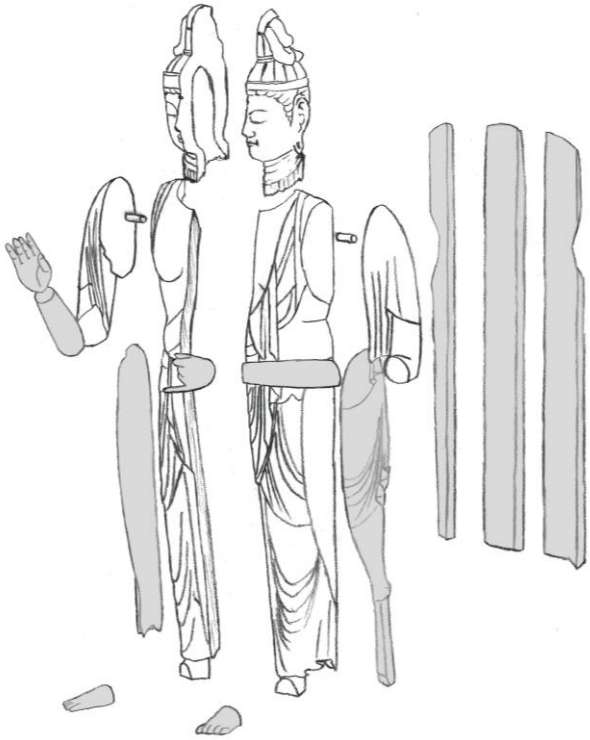

図 4　構造図

グレー色は後補部位

図 5　背面

図 6　粘土による想定復元

図 7　後補塗膜の除去加工画像(CT データ)